

海自給油中断

他国による代替困難

主要国 補給艦保有数に限り

【海上自衛隊補給艦とときわ艦上(インド洋北部)＝本間圭一】アフガニスタンでの「不朽の自由作戦」(OEF)における海上阻止活動(MIO)で、海上自衛隊が6年近くにわたりインド洋に派遣した補給艦は、海上任務に不可欠な極めて重要な艦だ。多国籍軍は現在、補充を検討しているが、補給艦を潤沢に保有する主要国は少なく、今回の海自離脱による戦略的な損失は過小評価出来ない。

〈本文記事一面〉

補給艦は、味方の艦に対し、任務に必要な物資を海上で供給する艦船で、主要国海軍では、「補給のない活動はあり得ない」と言われるほど、作戦の大半に組み込まれる。例えば、圧倒的な軍力を誇る米空母戦艦群を支えているのは、巨大な補給艦の存在で、イラク戦争に派遣された空母キティホークの約20日間の航海を可能にする補給能力を持つ。海自が参加した今回のMIOでは、今年8月末

までに不審船の無線照会が約14万回、乗船検査が1万件以上実施されたが、その背後では、「ときわ」などの補給艦が24時間態勢で常に任務に従事していた。現在の海上阻止活動の補給艦数は、日米英の4隻態勢とされる。それだけに、「ときわ」幹部は「日、撤収後の補給態勢について、「他国に負担が行く」と言明、MIOへの影響に懸念を示した。事実、10月29日に「ときわ」から最後の給

油を受けたパキスタン海軍幹部は、日本側に補給継続を打診しながらも、同時に、バーレーンにあるMIOの司令部に他国からの補給を依頼したとの情報もある。だが、主要国の保有数は十分とは言えず、海自筋によくと、国防に必要最低艦数とされる4隻以上を保有するのは、日米英など主要7か国に限られ、どの国も積極的に国外に派遣できないのが実情という。石破防衛相は「日、隊員に向けた

ビデオメッセージで、「高度な技術と能力を要求される洋上補給を長期間安定的に実施できる国は世界で数か国しかない」と強調した。海上阻止活動の海域は、インド洋北部を中心に少なくとも400万平方キロと広大。「ときわ」が離脱する意味は大きく、英王立統合軍事研究所(RUSI)のアレックス・ニール主任研究員は「ときわの活動能力は非常に高いため、今後は米国に補給コストの増加を強いることになる」と指摘する。MIOの司令部では現在、「ときわ」撤収後の補充を検討している模様だが、その計画は容易ではなさそうだ。



インド洋で、パキスタン駆逐艦(左)に最後の給油をする海上自衛隊の補給艦「ときわ」(10月29日)＝海上自衛隊提供

「失望している」

米国防務省副報道官

【ワシントン＝五十嵐文】米国防務省のトム・ケーシー副報道官は「日、インド洋での海上自衛隊の給油活動中断について、「失望している」と述べた。米政府当

局者が給油中断に関し、強い失望感を表明するのは初めて。その上で、「これまでの日本の活動を高く評価しており、できるだけ早く活動が再開されることを望む」と述べ、新テロ対策特別措置法案の早期成立に期待感を示した。